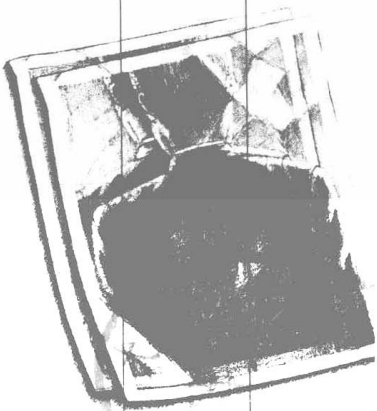
父の年輪

太佐順

冬樹社

父の年輪



太佐順

冬樹社

著者略歴
太佐　順（たさ　じゅん）
昭和12年鹿児島生れ。32年から東京在住。週刊誌ライター，デザイン・スタジオ，出版社などの勤務を経て，現在は著述業。49年「父の年輪」が芥川賞候補となる。作品集に「祈りの部屋」

父の年輪

昭和54年9月15日　初版第1刷発行

著　者　太佐　順
発行者　高橋直良
発行所　冬樹社
東京都千代田区神田神保町3-27-6
郵便番号101　振替 東京8-7757
電話　東京 264-0346（代表）

印　刷　図書印刷
製　本　美成社
定　価　1200円

©Jun Tasa 1979　0093-10317-5190

目次

父の年輪……5
春の崖……35
母の川……105
枇榔の里……143

装画　鳥居満智栄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

父の年輪

父の年輪

幼い頃からわたしは、「父」の事についてはあまり感傷的ではなかった。それは、世の中に父親というものがあるのだという感慨よりも、自分の前に父が存在しないという現実のほうを、事あるごとにわたしが、信じていたからだと思う。

何事につけても、ひ弱な反応しか示さないわたしが、こと「父」の問題に関する限り堅固すぎるほどの信念を持ちつづけていた。「父」はいなくてもよいのだとわたしは思い、そしてある時期、むしろ「父」はあるべきではないと、一種の頑なさからであったのか、本気でそんなふうに信じさえした。

だから「父」は、なかなかわたしの前に立ちはだかるすきがなかった。

学齢期に達した頃から、わたしは母方の祖父母と倶に過ごした。あるいはその時分に、父の存在を無心に質した時期があったかもしれない。そのほうが自然な光景のように思われるのだが、記憶は今ひとかけらも残っていないのだ。

例えば祖母に向かって、わたしの父は何処にいるのか、あるいは、何故自分には父がいないのか、等と「父」について確かめた様子は思い浮かばない。それは、父親がいないことのほうがわたしにとって自然だったからそうなのか、それともいま少し思慮深さがあって、この一事だけは決して口にしてはならないと、自分自身で「父」という言葉を禁忌のものにしてしまっていたからだろうか。いずれにしてもわたしが、「父」に関してとやかく訊ねなかったから、母は無論、祖父母にしてもどんなにかこのおとなしい男の子が育て易かったかわからない。

閉口したのは、それよりもむしろお節介な他人の詮索だった。わたしが高校三年になり、四十歳になって母が結婚した後からでは、他人に父の事を訊かれても義父の様子を話せばそれで済んだから困らなかったのだが、それ以前は、「父」について何一つ質されても答えるすべがなかった。その、鮮烈な思い出が一つだけ不思議とこびりついている。今でも、何かの拍子にこの時の光景を鮮明に思い出してしまうことがあるのだが、その時わたしは

「父は戦死した」のだと答えた。

中学生だった頃の出来事で、友だちの家に日曜日遊びに行っていた時、その友だちの母親に何気なく「父」の境遇を訊かれたからだった。

「そう？　戦死だったの……。じゃあ、遺族年金が、たくさん貰えるでしょうね」

友だちの母親は襖を開け放った隣りの部屋で、暮れがたの窓から差し込んでいる明りを当てに縫い物をしており、そしてその手を憩めず、わたしの顔を見ないで言った。その時の彼女の質問が、何気なく、でなかったことをわたしはおそらく見抜いていたかもしれない。彼女の実家が、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わたしの母の里と同じ内之浦という小さな港町であることを、その時わたしは知っていたはずだった。数え年二十一か二になったばかりの未婚の娘が、突如見知らぬ男の、子を、私生児として産んだ噂を、「父」の事を質したその友だちの母親が耳にしなかったなどとは信じられなかった。

戦死者の遺族が、年金を支給されるといういきさつを識らなかったわたしは迂闊だったが、彼女の意地悪な言葉が、年金を支給されるによって跳ね返ってきた時の羞恥とも屈辱とも言いかねる心の昂ぶりといったらなかった。躰じゅうが熱くなった。だからその事があってからというものは「父」を戦死者などに仕立ててしまうことは二度となかった。

母の妹や弟たち、彼等は勿論それぞれに一家を成し、子を育て、居住地も離ればなれだが、多分、彼等が会話の端々に漏らしたことをその都度、記憶溝の中に少しずつ貯め込んでいったのだろう、わたしは、わたしを産む前の母の様子を幾らかは知るようになっていた。九歳の夏、母が突然盲目に見舞われた不幸の事は、母の弟妹たちからではなく、祖母から回想を繰り返し聞かされたからよく憶えている。幼少の娘が、思いがけない忌わしさに襲われた因果を、祖母は、自分の夫の女道楽の結果だと信じ込んでいた。当時のいきさつを度々彼女がわたしに語ったというのも、今思い返せば、祖父の昔の過失を責め苛むための手立てだったのかもしれない。

母はその時小学校の二年生ぐらいだったはずだ。途中で学校を止めると、町に適当な医師がいなかったので、有明湾を一時間ほども船に揺られ横断して、志布志へ出た。盲目の幼き母はその町で何ヵ月かの入院生活を祖母と倶に過ごす。漁師だった祖父母の家は貧しかった筈だが……。おそらくかなりの治療費が必要だったに違いない、その医術の効果があり、完治したとは言えな

いまでも、七分通りぐらいの視力は取り戻すことが出来た。
母の視力がどれほどのものであったのか、事改めて確かめたことはないにしても、遊び呆けている遠くのわたしを捜し当てるのに、母が容易でなかった事が思い出される。母はその眼の治療の時、あらゆる種類の医療を試みた中の一つだった鍼の施術のために、片方の足を損ってしまい、それからというものほんの僅かだが、左足を曳き摺るようにして歩かねばならなかった。
「雪子はもう、それっきりで学校へは行かなかったよ」
と祖母は、寒い冬のいろり端で、火干しにする為の小魚の串刺しを時おり反転させたりしながら、幼いわたしに語り聞かせた。そんな時は必ずと言ってよいほど、無言の祖父が見苦しいほどに膝を崩し、間近かで煙管の煙をゆるがせていた。
祖母の語り口は、何となくわたしの耳に教訓的なひびきを伴わせていた。それは、いかにも幼少の母の不倖にくらべて、「父」のない境遇など高が知れているとでも言いたげだった。
母はそれきりで学校へ行かなかったという。それは、学習に耐えるだけの十分な視力を彼女がまだ回復しきっていなかったからだと祖母は言ったが、当時は今よりも一段とひどかったかもしれない左足のびっこを母が子供心に気にしていたことも想像できることだ。
学校へ行かない母は、再度志布志へ出て、そして逗まると、やがて数え年の十一、二歳になろうとする頃、三味線の芸を身につける目的で某氏の内弟子となった。もしかして再び失明するかもしれない事態の娘の保身の為に、身に芸を覚えさせるというそれが祖母にとって精一杯の知恵にちがいなかった。二十歳過ぎるまで、母は修業の歳月を他人の家で過ごした。そしてそれまで

の母について、わたしが知り得ている事はたったそれだけのようだ。

幼い日の、母の不倖の苦い思い出を、あれほど熱心に語り聞かせた祖母が、それ以後の母の身の上には触れたがらなかった。だから、母が辿った足跡は所々で断ち消え、自分の母の事をわたしは他人事同様にしか知らないと言ってよかった。それはひとつには、わたしが何も訊かなかったからであるかもしれないが、そこから先の母を語ることは当然わたしの出生の秘密に関わってきたから、祖母は避けたのだ。そういう意味では、「父」の事について何一つ語って聞かせなかった祖母は不実だったと、すでに今は亡い彼女のことを一種のうらめしさも含めてそんなふうに思うことがある。

そして祖母と同じ事は、わたしの叔父や叔母たちにも言えることだ。わたしより十歳ほど年長の母の弟などは、男同士という話のしやすさもあった筈だが、今もってただの一度も「父」の事を話題にした例しがなかった。彼自身、わたし同様に何一つ事情を聞かされていないとすれば、わたしの恨み言はとんだ濡れ衣にしかならないかもしれないが、しかし、「おまえの父のことだが……」とある日、彼自身が知らないのなら一層、それ位の事はわたしに言ってもよかったはずだ。ただわたしはその時困ったかもしれない。言ってみれば他人の手に犯されることが無かったから、「父」はわたしの深淵の場所で息を潜め、棲むことが出来たからだ。それは確かなことだと思う。だがそうでありながらも、一つの感情として「父」を明かさぬ人への熱気を含んだ恨みがましさを消すことが出来なかった。

叔父に限らず、無論叔母たちにしても同罪だった。彼女たちはわたしの「父」に関してだけは

唖でしかなかった。あるいは彼女たちは、お前の方から訊き出してもよかったのではないか、とわたしが彼女等を責めたがっている事を知るとすれば、それくらいの反問は言い返すかもしれない。私たちにではなく、母自身に訊けば済むことだと。

確かにそれほど「父」の事を識るについて簡単なことはない。わたしが問い、母がそれについて答えさえすれば済む。たったそれだけのた易い手続きに過ぎない。それは、喋る方法を覚えた一、二歳の子どもでも出来る芸当で、「父、何処？」と口にしさえすればよかった。

しかしわたしは黙り続けた。「父」の事を口にすることが母を苦しめるのではないかと、子ども心に、怖れ、そしてわたしは、母親をいたわることを既に覚えていた。母子二人きりで向かい合う機会はいくらでもあったのに、わたしはいつも言葉少なかった。言葉の弾みで、母に訊く身の上話が何処かでうっかり避けなければならない禁忌の場所に紛れ込むのを、きっとおそれていたのだ。だから母とわたしは常に、「父」を起こさないようにその栖をさけて通った。

「父」のまぼろしがわたしの前に現われたのは、それは初め四、五歳ぐらいの時分だったのではないかと思う。自分の存在を自覚しうる年齢とそれが重なっているのは、そのまぼろしが幻視としてわたしの内部に立ち現われるのではなく、外界そのものに「父」を見ようとしたからだった。つまりわたしの最も古い記憶、眼を瞑るとひとりでに浮かんでくる風景は、一日のうち四回か五回夥しい白煙を噴きあげて通り過ぎる汽車である。わたしが今立っている縁先から、庭の木立ちを越えて、その黒い怪物にも似た巨大な汽車が車輪の音をうならせて通過して行くのが見える。

その汽車の線路際にある家のたたずまいのあちこちを歩き廻っている幼い自分が、最初のわたしだった。二階建ての、部屋数だけがやたらと多いその家の中に、「父」がいた。小柄で、いかにも立派そうな口髭を生やし、子供の眼にも整った顔立ちの、その家の主人である男と、屋敷内のいたる所でわたしは出逢った。「おい……！」と彼はわたしの名を呼び捨てにした。そして二度ほど、わたしを烈しく叱ったことがある。それはわたしが、度々その危険さにおいて注意を強いられていたにもかかわらず、汽車の線路の中で小石を集めながら遊んでいた時であり、今一度は、家からさほど遠くない河の岸辺に花を摘んだ時の二度だった。彼は不意にわたしの前に立ちはだかると、顔を赤くして激怒し、そして打擲した。

自分の身近にいた一人の男に対して、わたしが「父」を感じ始めたのは、多分そのような事情からだった。わたしを烈しく打つことの出来る人間が、他人である筈がなかった。頭上に振りかぶった大きな手が、自分に何かを教えようとしているのだという事を、わたしは見抜いていた。

しかしわたしの生の軌跡の中に、初めて現われたその男は、実際は血縁のある父親ではなかった。母は当時、幼少のわたしを伴ってそこに養女として来ていたのではないだろうかと、推測できる。その家は、『満寿屋』という屋号の料亭だった。わたし自身の屋敷内での我が儘な振舞いと、女中たちが母を見る時の一目おいた眼の動きなどで、子供のわたしも朧ろげながら母に養女を感じた。

「父」は、だからわたしにとって養祖父とでも言うべき関係にあったのかもしれない。その頃「父」はたぶん五十歳少し前だった。顔色の艶々した血気旺んな壮年という印象がある。そして

今でも彼の事を回想する時最初にわたしの眼に浮き立つのは、猟犬を二、三頭も従えて、背中に二連発の猟銃を背負い、見るからに頼もしげな猟人の装いを凝らした「父」の姿だった。わたしは養祖母の背におぶわれ、母と三人で、同業の旦那衆たちと連れだって晴がましく出発する「父」を見送っている。猟犬たちが、興奮し絡み合いながら、「父」の後先になり遠ざかって行った。

この遠ざかるという光景が、「父」の事を思う時に、何故いつも最初にやって来るのかと、訝ったが、それは間もなく「父」がわたし達の前から去って行った為だ。

いたる所で「父」を、わたしはじっと凝視めていた。帳場の大机に向かって、わたしのよりも何倍も分厚い座布団にすわり、多分客の遊興費の請求書でも書いていたのだろう、派手な丹前姿のそんな「父」を、眠気を覚えた眼を堪えながらわたしは見ていた。酒席に興じた客の乱れた声が、「父」と二人いる階下の帳場まで、時おり降ってきた。調理場で、賄いの者を励ましている養祖母の張りのある声も聞えてきた。その時母の姿は見えなかったが、おそらく二階の饗宴に加わっていたか、それとも慌しい調理場を手伝ってでもいたのだろう。もし三味線を弾く賑わいが、何処か二階の部屋から伝わってくれば、母はもちろんそこに居たのだが。

「父」の手で為される一切が、わたしにとっては絶対的な規範だった。わたしの前で演じられる「父」の挙動にわたしはいつも光が満ちているのを感じた。とりわけわたしを興奮させ、「父」を頼もしく思わせたのは、翌日の狩猟の備えに銃の手入れに余念のない「父」の姿をかいま見る時だった。「父」は、二連発式の黒く光った銃身を丹念に油気をふくませた布でみがいていた。空の薬莢の中に、計量カップを持った手を小刻みにふるわせながら火薬の粉を注ぐ、そして最後に、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com